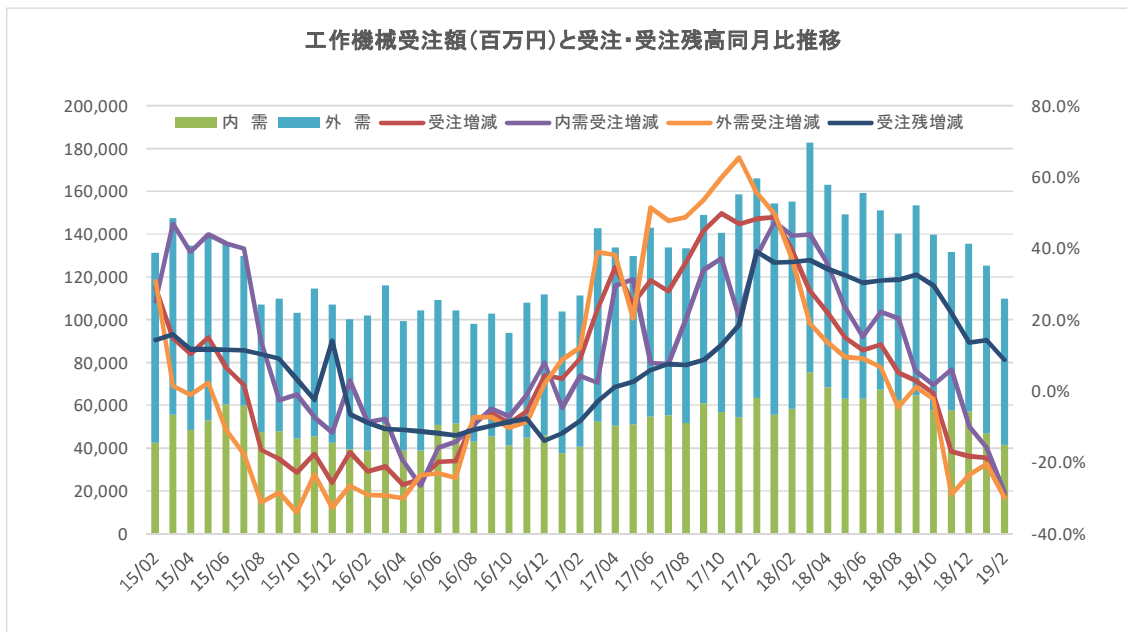


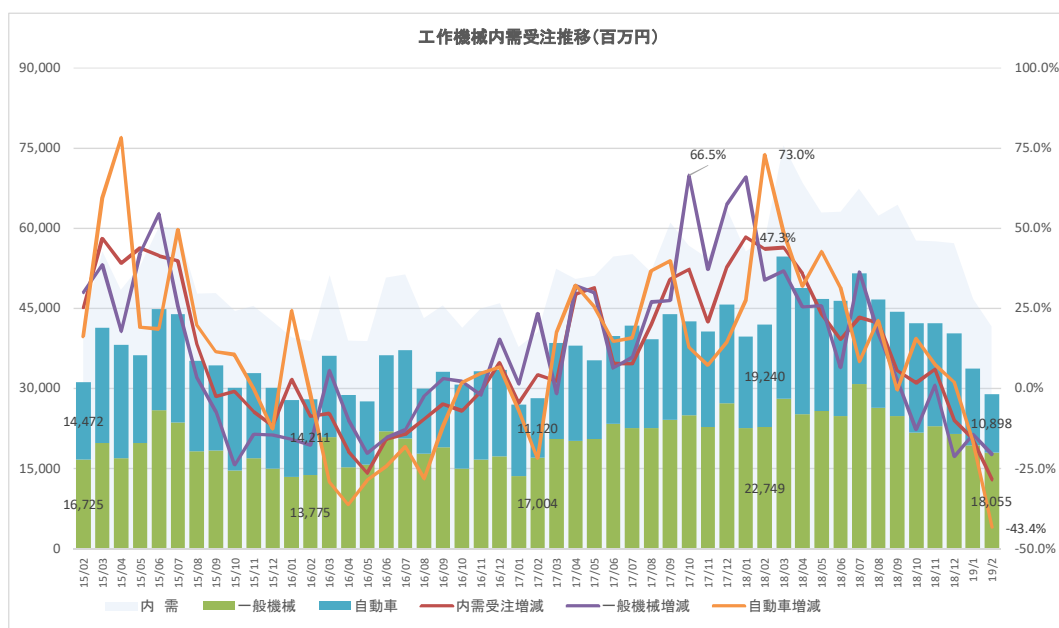
2019年工作機械業界（3/20調査）：2月受注29%減で上期低迷続く

2019年2月受注額は29.3%減の1097億円は25カ月ぶりの1100億円割れ

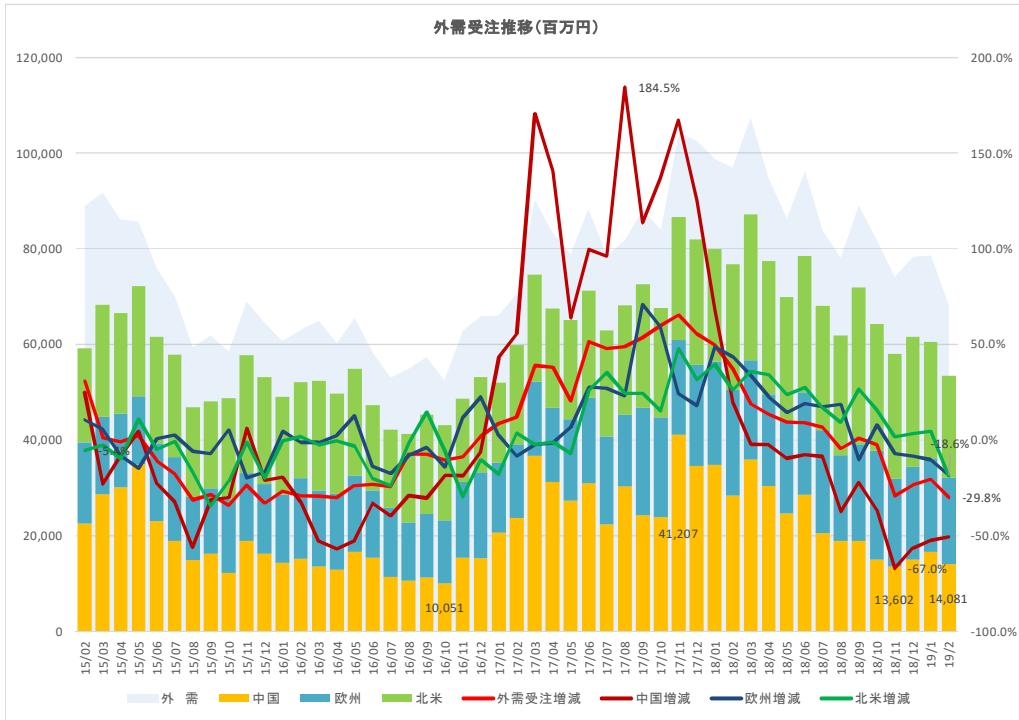
日本工作機械工業会が3/20に2019年の2月の受注額確報を発表した。2月の受注額は1097億円(29.3%減)と、5カ月連続の前年同月比割れとなった。国内外別では国内が28.4%減の417億円、外需が29.8%減の681億円に。25か月ぶりに1100億円を割り込んだものの、1000億円超えは28カ月連続、受注残高は8150億円(8.1%増)と高水準を維持。



国内は2カ月連続で500億円割れ、前月比比較で5カ月、前年同月比でも3カ月連続減少した。自動車向けが43.4%減と大きく落ち込み、一般機械、電機精密向けも20%減と、世界景気の先行き不透明感、3月のものづくり補助金待ちの影響も出た模様。



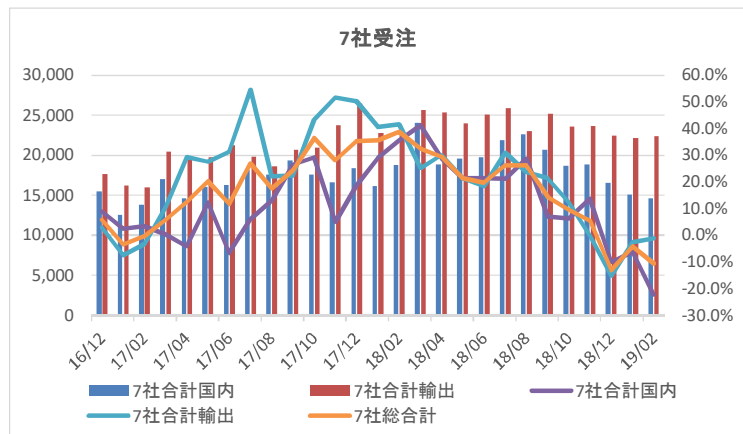
輸出は5カ月連続前年同月比割れ、25カ月ぶりに700億円割れとなった。中国が景気減速、春節の影響もあり12か月連続前年同月比減少で50.4%減、但し141億円は11月の136億円を割り込まずに推移した。欧州は4カ月連続前年同月比減と、急速に悪化、北米は21カ月ぶりに前年同月比18.6減の213億円となり、主要3地域何れも前年割れに。なお、外需の業種別では主要4業種全てがマイナスで、特に電機精密は57.0%減、自動車も34.7%減と厳しさが増している。



2月の工作機械販売は5.1%減の1308億円に止まり、受注残高は前年同月比8.8%増の8150億円と、依然として約6か月の受注残を抱えている。現状、リーマンショック時のような大きなキャンセルの発生が出ておらず、工業会2019年受注予想1.6兆円を1000億円程度下回る状況ながら全体として受注残消化で販売額確保が可能な状況は続いている。

工作機械各社は豊富な受注残を維持するものの足元で機種構成や仕向け先で格差生ずる

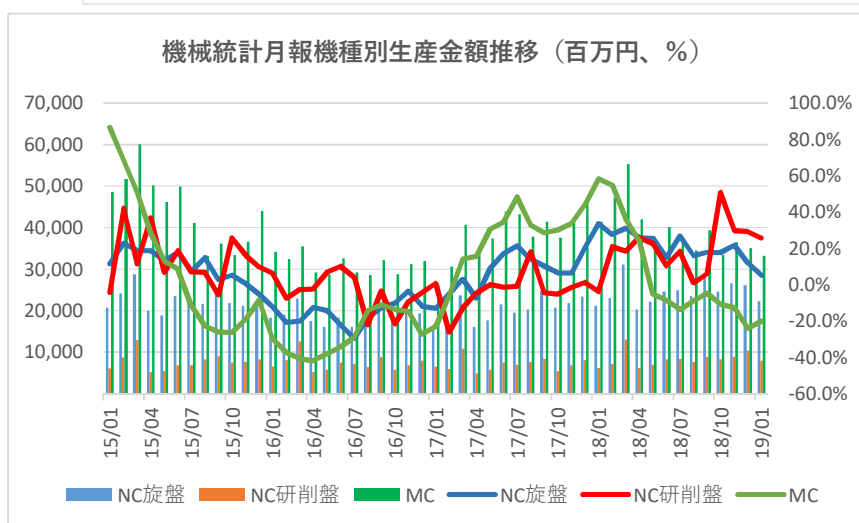
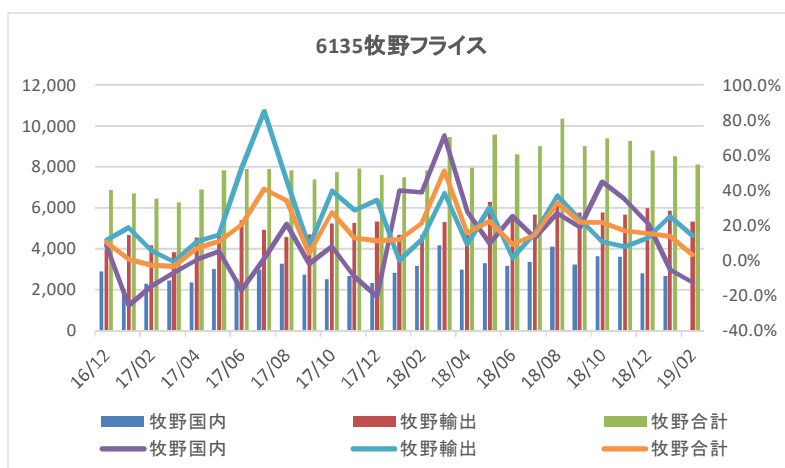
日刊工業新聞で月次受注を公表している工作機械7社の推移で2月は前年同月比10.7%減の377億円となり、3カ月連続でマイナスとなった。個別で牧野フライスは国内が12.6%減だったものの輸出が14.0%増で全体では3.3%増と17年4月からのプ



ラスを継続している。また OKK は米国自動車向け大口受注が寄与し 11.6%増に。

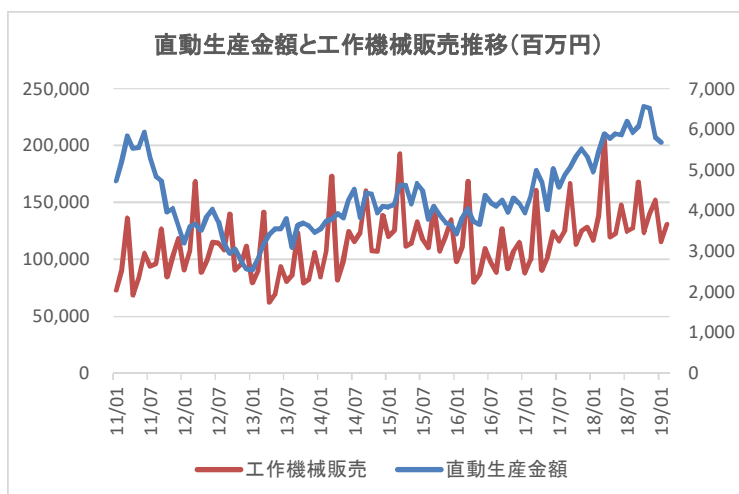
なお機械統計月報で機種別生産推移を見ると、旋盤、研削盤は依然として好調を継続、一方では 5 面加工機を除き MC が大幅に減少している、

このため 7 社以外では平面研削盤、芯なし研削盤、旋盤の高い伸びに支えられ、岡本工作機械やミクロン精密、高松機械、滝沢鉄工所、太陽工機、浜井産業などは好調を継続している模様。



2019 年は上期低水準の受注続くも秋口に回復し 2020 年に再度受注拡大へ

2 月受注は中国での春節、国内も「ものづくり補助金」の第 1 回目申請締め切りが 2/13 など、受注手控えた環境にあり、国内向けが想定以上のマイナス、海外は予想通りの厳しさで 1 月の受注を下回った。しかし一方では自動車産業で環境対策、EV 開発投資、自動運転などの案件が目白押しである。また中国も春節ながら昨年 11 月の数字を下回らなかったことで、2 月ボトムに 3 月は年度末要因もあり前年同月比比較では 2 ケタ減が続く見通しながら、絶対額としては 2 月を上回ろう。4~6 月は中国の景気対策、日本でもものづくり補助金効果などが期



待でき、更なる絶対額の落ち込む可能性は少ないと判断する。販売は依然として通常より約2500億円近い受注残高が積み上がっている状況で、ボトルネックのボールネジや直線運動用軸受、さらにはサーボモータなどの供給も正常化し、受注残高消化により受注残の落ち込みほど売上高の落ち込みは少ない模様。

続く2020年は改めて工作機械受注が大幅拡大する要素がある。まず世界的にIoTなどでデータ需要拡大から次世代型のデータセンタ投資が活発化、5G端末の本格発売、半導体設備投資が再度ピーク更新する見通しにある。自動車も自動運転対応、EV投資が控え、

自動車関連の工作機械受注拡大が見込める。このため、2020年の工作機械受注はIoTソリューションビジネスの拡大を含め2017年並みの受注額に回帰してこよう。

